

“産業復活”の気迫と技が生んだ手製靴

1870（明治3）年に日本初の靴工場が開設され、靴産業の歴史が始まり150年。その中間点にあたる75年目の1945（昭和20）年は太平洋戦争終結の年。戦前の日本の靴（産業）は軍靴・軍需によって発達を促されてきたが、戦後の75年は一転、民需の時代となり、平和産業・生活産業、そしてファッション産業・健康産業として発展していく。

終戦直後、産業復活と洋装時代の新たな靴づくりに情熱を燃やす業界人や職人は、将来を見据えた技術革新や商品開発に意欲的に取り組んでいった。

その一つが製靴技術競技会で、1948（昭和23）年10月には戦後最初の製靴技術コンクールが開催されている。まだ皮革統制が解除されておらず、材料の入手も自由にはできなかったが、戦時下10年のブランクを一日も早く取り戻し、国際水準に追いつく技術を身につけたいという業界の熱意が開催を後押しした。出品された靴は450足。並行して優良靴



シューフィル ^{たち} 城 ^{いっ} 生

展示即売会も行われ、来場者は3日間で5000人を数える大盛況であった。

以後、製靴競技会は様々な形で行われ、多くのメーカー・靴職人が参加し腕を競い合った。その常連であり、第4回製靴技術競技会では通産大臣賞を受賞するなど技術力の高さを認められていたのが小笠原製靴の小笠原光雄（底付職人）・茂好（製甲職人）兄弟である。

そんな小笠原兄弟の技術力の高さを示す紳士靴が、東京・神田の東靴協会に収蔵されている（写真）。1959（昭和34）年、東京都主催の東京商品名作展（日本橋三越で開催）で“審査員全員が無条件で第一位と評価”したもので、木型、型紙、製甲、底付け、仕上げ、すべてに日本の靴職人の心意気、技術の粋を集めた最高水準の手縫い靴として今なお輝きを失わない。現在でも、現役の靴職人や業界人、靴学生など誰もが見惚れるような名靴だ。その製作意図を兄の小笠原光雄さん（故人）が当時の業界紙で語っている。



現在の小笠原茂好氏



「あの靴は弟子たちの手本とするため当落は考えずただ一心につくった。従って甲革も見栄えがして比較的製甲の楽な黒を使わず、わざとむづかしい濃茶色、それもミシン目を美しくスキのない最高の技術を目指して、舶来の本銀判を使つた。だから名作展でも即売は辞退した。」（東京靴通信「手製靴を育てる」昭和34年4月5日付原文ママ）。